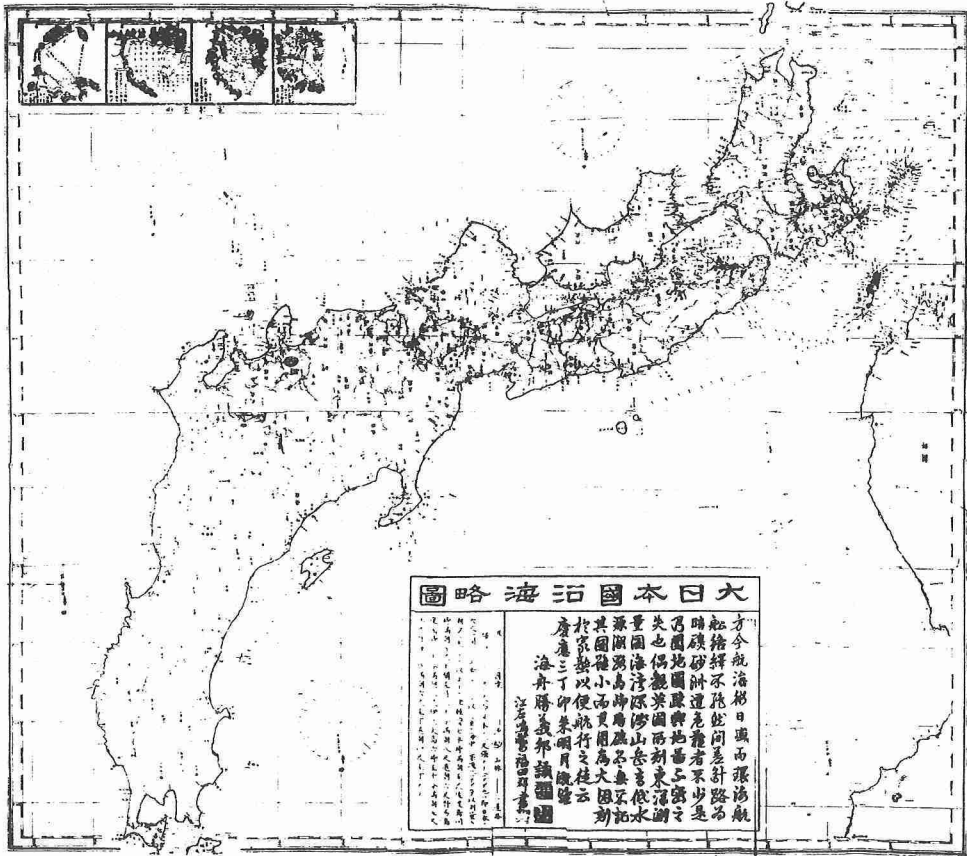


報 廣

東京大学理学部

(題字は柴田雄次名誉教授)



勝海舟署名の日本地図（慶応三年） 説明文を正しい位置におくと日本は「さかさま」になる。上を東にした地図、上を西にした地図などもある。チベット人の地図は上を北にしても、東を左にするという。(S)

目 次

停年についての四つの短い感想	学生時代の思い出	
野上耀三…… 2	渡辺直経教授を送る	渡辺直経…… 6
野上耀三先生	萩原雄祐先生を偲ぶ	尾本恵市…… 7
橋本淑夫…… 2	封筒の世界旅行	堀 源一郎…… 8
新井城をあとに	寺山 宏…… 5	飯高 茂……10
小林英司教授を送る		
	<学部消息>	

停年についての四つの短い感想

野上 耀三 (物理)

Partir, c'est un peu mourir と云う言葉があるけれど停年退職には確かに死と似たところがある。第一にそれは誰にでも必ずやって来る。またそれが近づくときまわりの人はふだんより妙に優しくして呉れ、そのことに触れなければならない時にはいつも「失礼だけれど」と云う接頭語がつく。大きな違いは、その時期が予めわかっている事と本人が「葬式」に参列できる事である。

停年教授の送別会の時には学部長が「この度は〇〇教授がめでたく御卒業されることになり……」と云うのが慣例のようである。これは理学部だけでなく工学部の同じ会でも全く同じ表現だった。いつもこの「卒業」と云う言葉に漠然とした違和感を覚えたが、今度自分の番になって見てその理由がはつきりした。大学を去るのは同じにしても学生の卒業と我々の退官との差は、長距離レースの先頭走者と周遅れの走者が同時にゴール・ラインを通るようなものである。

一月に或る会で色々な学部の先生方と一緒にになった時、最終講義のやり方が学部によってどう違うかを伺って見た。特に印象に残ったのは経済学部の場合で、最終講義の前座として後輩の教官の一人が御本人の業績の紹介と評価を列席者の前でやる型式だそうである。その場合、儀礼的にほめるだけでは紹介者の勉強不足をあとで咎められるし、と云って余りけなしては礼を失うのでこの掛りを引き受けた方は大変苦心されるとのことだった。理学部にはこの習慣がなくて有難いと思う。

今までに聞いた退官の辞の中で一番堂々として感銘が深かったのは坪井忠二先生の次のような言葉だった。

「私の地球物理学に関する仕事を交響曲にたとえるならば、今までに第三楽章までは完成したがこの数年間は雑用が多くてその先が余り進まなかった。これからは暇が出来るので最終楽章を書き上げて交響曲を完成させます」。これだけの自信に満ちた言葉を云えるとは何と美しいことだろう。

野上 耀三 先生

橋本 淑夫 (物理)

野上先生は昭和24年3月に本学部物理学科を卒業された。このクラスは、終戦後最初の入学組で、戦争中に大学を出て軍隊に勤めた人で、もう一度自分

のやりたい学科に入りなおした人が多かった。野上先生もその一人で、昭和16年に工学部機械学科を出て、海軍技術研究所に勤めておられたが、同僚の物

理出身の人達のオリジナルな物の考え方に魅かれての二度目の大学生活であったが、幼いお子さんをかかえての戦後のインフレ中の生活はなかなかつらかったそうである。

昭和33年に助教授になられ、嵯峨根先生、百田先生のあとをついで、戦前から生き残りのバンデグラフ加速器による原子核実験研究を進めて来られたが、昭和34年に、原子力の研究と教育に関する学部間協力構想に基づいた、原子力協力構座である核反応物理学講座に移られ、当時新設された工学部原子力工学科の教育に協力されると共に、昭和36年から学内共同利用設備の一つであるタンデム加速器の建設に当られ、国産第一号機としての困難さに加え、いわば理想論である学部間協力構想が、諸方面の十分な理解を必ずしも得られていなかったという情勢の中で、諸種の苦勞をされながらこれを完成された。更に、タンデムを含めた原子力共用設備が、特定の学部学科から過大な影響を受けずに、真の学内共同利用を行えるようにと、原子力研究総合センターの実現に尽力され、昭和42年同センターの発足と共に、初代センター長になられた。また最近は、同センターが窓口になっている全国の大学のための原研共同利用の運営委員会委員長をつとめられている。

筆者は、昭和33年暮から先生の助手として本学部に勤めるようになって以来ずっと今日まで先生と共に過して来たのであるが、先生は大変温厚なお人柄

で、常に若い研究者たちを育てるには、その人達の自由な発想を伸ばすのが一番だと考えられ、新しい研究テーマについての相談を受けると、いつも肯定的に受止められ、可能なかぎりその実現のための条件を調べてやるように努められた。このような雰囲気の中で過した弟子には、現在全国にわたり中堅の研究者として活躍している者が多くいる。

先生は技官層にも分け隔てなく接して来られた。殊に原子力センター発足当初のセンター長時代には、センター設立の主旨であるセンターの独立に力を注がれたが、その結果センターの主要人員構成を占めることになった技官の実力を伸ばすために、自主的な自己研修の方式を作るなどの努力をされた。職員組合に対しても古くから理解を示されており、そのせいで、学内紛争の際には、東職に対する交渉委員に引張り出されて紛争解決の努力をされたりした。

先生も昔は健脚家で、毎年の研究室の遠足の山登りにも先頭をきって歩かれたものであるが、タンデム加速器建設の苦勞のためか髪が白くなり、近年はそれも薄くなられ、お孫さん二人を持つにふさわしい好々爺の風貌をされている。四月からは明星大学で教育研究に携わられるが、同大学では大学院設置の計画があり、もう一度新組織作りに尽力されることになる。先生の御健康と御活躍を祈って筆を置くことにする。

新井城をあとに

小林英司（臨海実験所）

私は昭和17年9月に、半年繰上げて卒業させられてしまったので、未完成教育を受けたものです。今だに未完成なので、身分は違っても、もう半年間在

籍したいような勝手な気もします。それにしても35年余（この間外国に合計6年足らずでしたが）、これまでの人生の半分以上も東大に在籍したことに

なります。このたび、一緒に退官される人類学教室の渡辺直経君とは、教室が隣り合わせでもあったし、また、学生当時理学部会の委員を一緒にしたせいもあって親しい友人であります。彼は学芸委員で、私が会計委員、一番がっちりした応微研の長谷栄二君が庶務委員でした。小石川の植物園で学生大会を行うので、模擬店を二、三入れ、さてこれからという時に、日本最初の空襲に出会い、学生大会は流れ、ほとんどの人は上げました。残り者(物)には福があるといいますが、寿司、菓子、そばなど喰い放題になりました。

油壺の臨海実験所には9年前に、大学院学生7名、研究補佐員1名と共に移りました。常駐の学生がこんなに多数いたことがなかったので、慌てて病院用のベットや布のつい立てを購入しました。研究室には大部屋が一つあてられましたが、物置のようなもので、学生諸君と共に机を集めたり、机上の棚を組み立てたり、研究室作りから始めたものです。実験器具はいろいろの研究室で、足りないものを親切に貸して下さり、今でも大変ありがたく思っています。このような状態で研究を開始したので、学生諸君とは朝から夜中まで一緒に、まさに寺小屋式教育的なところがあつたような気がします。以後、この状態は9年間変わらず、誰もノイローゼにもならずに続きました。とにかく、研究は皆よくやったと思っています。

所長3年間のうち、第1年目はヨットハーバー問題があり、文部省、東大当局ならびに関係諸学会の応援を受け無事におさまり、2年目には都市計画問題があり、総長の要望書、事務局長の来所など、また、植村前部長には神奈川県知事との面会に御同道いただいたこともあり、実験所を利用して実習を行う他大学の理学部長の要望書などもいただき、何とか問題も切り抜けられた。3年目には業者への貸地の払下げ問題が起り、政治家も絡み、財務局からの圧力もありましたが、何とか抑え、反対に貸地の半

分は大学へ返還していただきました。文部省、環境庁、市議会、県議会、各政党議員、新聞社、漁港事務所、漁業組合との交渉など、本郷では考えられないような渉外事務がありました。理学部・本部当局の理解と応援が何よりの力でした。このような背景のもとに、実験所の設備の近代化、寄宿舎改築などいろいろのことに、当局の積極的な御支援を賜ったことに非常に感激致しております。環境問題には、全国臨海・臨湖実験所所長会議も大きな支援の手を伸ばしてくれました。生化の酒井彦一教授、現北大低温研の茅野春雄教授(当時東大教養学部)もありがたい関心を寄せられ、いろいろと助けて下さった。また学生諸君も研究をしながら、毎夜遅くまで環境に関するデータ蒐集に努力してくれ、ありがたく思っています。

所長をやめさせていただいてからは、学会の仕事に力をさきました。学生諸君と朝から夜中まで一緒に仕事ができ、大きな進歩が得られました。実験所周辺には豊富な生物相があり、英、米、西独、東独、スエーデン、オーストリーなどからも協同研究に来所し、楽しい思い出をつくりました。学生諸君の英会話もぐんとうまくなりました。

御存知のように、実験所は三浦一族の新井城の趾に建てられたもので、空堀り、物見櫓の柱のあと、千駄矢倉の洞穴など、歴史的なほいが濃い所であり、また、自然の草木もそのまま残っており、春秋には野草が目を楽しませてくれます。空気の澄んだ油壺から、空気が悪く人混みの東京での〇〇会に出席するのは、排気ガスを飲み込むような感じがして、つい出足を挫かれる結果になることが多かったわけです。自然を相手に自然の研究(内分泌学ですが)が続けられたことは、大変ありがたかったと思い、感謝しております。東大を去っても研究を続行できるところへ就職致しますが、今後ともよろしくお願い致します。

小林英司教授を送る

寺 山 宏 (臨海実験所)

3月になると、毎年の事ではあるが永年常日頃私淑していた先生方の何名かが、停年退官されることとなり、春の訪れとはうらはらに複雑な淋しい気持ちにさせられる。

若い時は、退官される先生方は、いずれもその時代を代表するパーソナリティーと卓抜した学績によって、その先生の御退官と共に、一つの時代が終わったような深刻な畏敬の念を抱いたものであるが、自分自身次第に年をとってくると、先生を送ると云う気持ちから、だんだんと友人を送ると云う気持ちが増してくることも致し方ないことであろう。本年理学部を去られる先生方は、すべて昔流に言えば功なり名とげての御退官であり、見方によっては定年までの永い間、御健康のうちにその重責を完遂された事は、まことに慶賀すべきことであるかも知れませんが、逆にまたこんなに元気でいられる先生方をお送りしなければならぬと云う現実に直面すると、何とも申し訳けない気持ちがしてなりません。

小林英司教授の場合、甚だ僭越ではありますが、永年、動物学教室および付属臨海実験所において、同僚として労苦を共に致して来た間柄であり、今先生をお送りするにあたって、私は心から御苦労様でしたと感謝の念を申し上げたい。

小林教授は、動物学教室の生え抜きであり、戦争中一時軍籍にいられた他は、終始動物学教室および臨海実験所において教官として、また所長として貢献されてきた。教授は仕事が生き甲斐であり、趣味

でもあるといった方であるようにお見受けする。それは教授の専門とする比較内分泌学の分野の御研究と、それに関連する学生の指導、学会における御活躍、また教室や実験所における管理運営における御努力において立証されており、まさに全身これ火の塊りといったような情熱を傾けてこられた。数年前、実験所所長として、環境汚染を心配され、精力的な御尽力をされたことは、折ふしの教授会での御発言からも尙我々の記憶に新しいことであります。

伝え聞く所によりますと、先生は学部学生実習の頃から既に研究者としての優秀な素質、頭角を示された由であります。その識見と情熱は年と共に益々旺んで、先生の学術的業績は、実験形態学、内分泌学、脳中枢神経系を中心とした比較内分泌学から更にヌタウナギの生態に至る洵に巾広い学問的領域で、数多くの国際的にも輝かしい成果をあげられると共に、多くの後進を養成されました。本年夏には、先生の退官を記念して、国際シンポジウムが内外の学者を集めて企画されているのも、むべなるかなと思われます。

今小林教授を送るにあたり、いろいろな事が頭をよぎり、かき詰りたいことも数多くありますが、その学問的業績や御活躍が余りにも多く却って紹介するのに困難を感じます。先生は、今尙エネルギーの塊りの感があり、今後とも益々我国の学術の進歩のために御活躍されることは疑いありませんが、ただ友人の一人としては、何分にも御自愛をとその御健康を祈ってやみません。

小林教授は東大御退官後は、東邦大学理学部生物学教室教授として、更に教育研究活動をつづけられる予定と伺っております。尙御家庭は御夫人と共に、

2男1女（既婚）の子福者でいられますことを申し添え、今後とも御家庭の末永い御多幸と清福を祈りたいと存じます。

学生時代の思い出

渡 辺 直 経（人類）

いつの間にか年をとって、このたび停年退官することになった。こういうときには兎角昔のことが思い出され、懐旧の念にかられる。私が昭和15年に入学した当時は日支事変の最中で、世は非常時といわれたものの、まだ物心両面にゆとりがあった。その年の夏、埼玉県黒谷貝塚で野外実習があって、ある暑い日の昼休みにラジオが日独伊三国同盟の締結を報じた。明る年の暮には太平洋戦争が勃発して、時局はいよいよ重大となった。その翌年の春、植物園で恒例の理学部園遊会が催される日に、準備のため理学部会の委員が大学正門にさしかかったところ、見なれぬ飛行機が低空で飛び去った。間もなくこれが米軍の艦載機とわかって大騒ぎとなり、無論園遊会は中止、注文したアイスクリームやすしが残って困った。同じ春に徴兵検査を受けたが、長髪はまかりならぬというので、涙をのんで丸坊主となった。検査の結果は乙種合格で、兵科は歩兵の宣告をうけた。その頃大学では毎週軍事教練の時間があって、これに合格しないと卒業ができない。運動場や三四郎池の界限で野外教練のある合間に、当時の法文経の教室で配属将校が軍事講話をした。ある日、今度一緒に退官する小林英司教授と隣り会わせて雑談するうち、海軍に予備学生という大学や高専出を将校にする制度ができたことをはじめて知った。われわれには技術将校になる道はなかったから、卒業すれば陸軍の兵卒になるほかはない。思っただけで憂鬱であったところに、予備学生の話は全く耳よりで、早速志願してみると、運よく合格した。九月に繰り上げ卒業するとすぐ予備学生として台湾で訓練を受け、あとはずっと軍司令部にいて終戦を迎えた。

大学に入学したとき、人類学科はできたばかりで、私はその2回生であった。人類学教室は明治26年人類学講座ができたときからあったのだが、学科として専攻学生をとるようになったのは昭和14年である。以前から人類学科を作るという気運は、大学の中にあったようであるが、その機が熟したのは昭和13年であった。この年に、当時東北大学の解剖学教授であった長谷部言人先生が、時の長与又郎総長の懇望によって理学部教授となり、人類学科の創設に当たられた。長谷部先生は人類学の業績で内外に高名であったが、停年まで僅か5年しか残さない時期に敢えて赴任されたのは、先生が懐いていた人類学の理想をここに実現しようという、並々ならぬ情熱によるものであった。それはまず人類学科のカリキュラムに反映した。

人類学を専攻する者は、医学生以上に人体のことを知らねばならないというので、当時の前期つまり第1学年に、必修科目として医学部の人体解剖・組織・生理・生化学などの基礎医学の講義と実習を、医学部学生と全く同じに受ける仕組みであった。人体解剖の実習は、人間の死体を自分の手で切るというのもあることながら、それが毎日の午後半年以上も続くので、入学当初はいささか面くらった。また、人類学教室には人類学講座の初代教授であった坪井正五郎先生が、広い視野での人類学を標榜され、その伝統が続いていた。つまり身体を扱う自然人類学と先史時代の生活を研究する先史学、それに未開社会の生活を対象とする土俗学を包含する、広義の人類学である。土俗学は坪井先生が用いられたもので、民族学ともいう。ここでいう生活とは無論人間の生

活であるから、別の言葉でいえば文化である。文化は人類特有のもので、これを度外視しては人類を理解することはできない。人類学では、文化というものの本質やその発達過程を、未開社会の実態や先史時代の遺残から研究するのである。一般に文化といえば人文科学・社会科学の領域に属するが、これらの領域は科学といっても、科学の特色をそれほど發揮しにくいのが実情である。そこへゆくと土俗学や先史学は、実証的であるという点で科学となり易く、即物的であるという点で自然科学と結びつく機縁もっている。まして、生物としての人類は原始の昔から文化による生活を営み、文化によって作られた環境の中で生きてきたのだから、身体を研究するに

しても、文化との関係を忘れることはできない。それに、文化は人類特有のものに違いないが、もとを正せばやはり人類の生物としての特性から生れたものである。この謎を解くのも人類学の役目である。長谷部先生は文化に対する明確な考えをもって、土俗学や先史学を科学として確立しようと図られた。私は文化にも興味もっていたので、人類学科のカリキュラムに土俗学や先史学の講義や実習が組み込まれているのを見て、わが意を得たりと思った。だがやがて、私が考えていた文化がいかに甘いものであるかがわかって、いつしか強烈な長谷部イズムにすっかり洗脳されてしまった。

渡辺直経教授を送る

尾本 恵 市（人類）

人類学第二講座の渡辺直経教授（チョッケイ先生の愛称で通っているが、無論ナオツネが正しい）がこの三月一杯で停年退官される。私としては、学生時代より22年間ご指導いただいたことになり、今更ながら月日のたつ早さを感じている。教授はこの数年間ますますお元気で、理学部的法による考古学の研究に関する特定研究や、ジャワ島の人類化石を含む地層の調査などに八面六臂のご活躍ぶりであり、とても停年まぢかのお年には見えな。われわれとしても残念であり、教授もお心残りの点もあろう。しかし、今後は教室を離れて日本の人類学の発展のためにご活躍され、また時間的余裕も生ずるかと思うので、ご著書の完成などをわれわれ後輩としては期待している次第である。

渡辺教授のご専門は年代学、とくに物理・化学的手法により遺跡や遺物の時代の古さを推定する学問である。土器が焼かれたときに固定された地磁気の方法を測定する熱残留磁気法や、黒曜石（石器の材料）などの中の²³⁸Uの自然核分裂の飛跡をかぞえるフィッション・トラック法などは、教授によりはじめてわが国の遺跡に応用された。今日、理学的方法による考古学がわが国でもようやくポピュラーな

ものとなりつつあるが、その功績者の一人としての教授の果された役割はまことに大きい。

しかし、人類学教室のわれわれ後輩に対して渡辺教授は単なる専門的研究者としてよりはるかに大きな影響を与えられたと思う。それは何よりも、人類学という学問に対するすさまじいばかりの情熱と信念に裏打ちされた教育者としての態度であった。昭和14年に創設された人類学科の初代教授、故長谷部言人博士の高弟であった渡辺教授は、いわゆる長谷部人類学（ハセベイズム）の伝統を守り、人類学（生物としてのヒトの科学）における多様な方法論の平行的発展を望まれた。

人類は文化をもつ特異な動物であり、文化を発達させることにより自己の身体的特徴も変化した。つまり、文化により自然環境に変更を加え、これに適応するという形で人類は独自の進化をとげた。人類学の目的は自然科学の人間像をうることであるが、その接近法にはおのずから多様なものがあり、形態学、先史学、生理学など、いわば何をやってもよい。要は、“文化をもつ動物としての人類”との発想をもち、自発的にあたらしい分野の開拓をすることが

大事である、と教えられた。現在二講座しかない人類学教室で一種の研究室制度がとられ、形態、先史、機能、遺伝、生態の五分野の研究がまがりなりにも続けられているのは、このような理念にもとづくものである。

私共は、このような理念や学問論を教室で学んだというよりは、むしろ渡辺先生との個人的な会話を通じてより多く学んだ。先生は、小柄で貴公子そのままの風貌に似合わぬ酒豪であられたが、私共も学生時代に何回となく連れて行っていただいた酒席で主としてこれらの“教育”を受けた。先生と一緒に飲んだときに学問の話にならなかったことなど一度もなかったろう。料理には殆んど箸をつけずに杯（日本酒がお好きのようだった）を重ねつつ、学問とは何か、人類学はどうあるべきかについて熱っぽく説かれた。若気の至りで、率直に拝聴できずにあれこれと反論したり、ときには随分と失礼な発言もしてしまったが先生は一向に気をかけられぬごようだった。議論が高ずるとますますお飲みになるので、話しは堂々めぐりになることも多かったが、ほどほどにして切り上げることはお嫌いのようであった。やがて夜半近くの“魔の時刻”となると、突然会話がとぎれたかと思う間もなく、先生は坐ったま

ま眠ってしまわれる。しかし、一時間ほどで目覚められるのがふつうで、そこでお宅にお送りすることが多かった。

渡辺先生を語るとき、奥様のことを忘れることはできない。先生と奥様のロマンスが小説になっている（阿川弘之著「春の城」）ことは知る人ぞ知るであるが、私共は奥様にも大層お世話になっている。夜更けに先生を送ったままあがり込む無礼なわれわれに対し、奥様が嫌な顔をされたことは一度もない。また、いかに遅くとも奥様は起きておられたようであったし、先生がすっかりお目覚めで、「飲み直す」と宣言されれば、突然の来客にもかかわらず、酒とまことに気のきいた肴がたちどころに出されるという手際のよさであった。家庭をもつてみて、このようなことがいかに並々ならないことであるかが、つくづく判ったことである。

酒を愛され、学生を愛され、学問を愛された先生から、私共は教科書からは学べない多くのことを学んだ。最近ではご多忙の上に健康上酒を控えられておられる由で、あまりご一緒する機会がなくなったことは残念である。いずれ折を見て、先生ご夫妻をご招待し、今までにご馳走になった分の何百分の一かをお返ししようと思っている。

萩原雄祐先生を偲ぶ

堀 源一郎（天文）

去る1月29日の寒い朝、名誉教授萩原雄祐先生がおなくなりになりました。心筋梗塞ということで、お年は81歳でした。昨年は、天体力学界の最長老たる先生の80歳をお祝いし、重ねて、先生のライフワークとも言ふべき“Celestial Mechanics”の刊行を記念して、国際天文学連合シンポジウム“太陽系の力学”が開催され、世界中から天体力学者が東京に集まって、先生の長寿と大著の刊行をお祝いしたばかりでした。まことに痛惜の思いです。

萩原先生は1921年に東京帝国大学理学部天文学科を御卒業になり、同年理学部助手兼東京天文台助手、1924年には助教に昇任、1930年理学博士、1935年

に教授となられました。さらに1944年には帝国学士院会員、そして終戦後は1946年に東京天文台長になられ、以後御退官になるまで、戦災で荒廃した天文台の復興に力を尽されました。先生は当時のことを次のように回顧しておられます。「……終戦の翌年、肺炎から立ち上った私は、自宅が戦災で全焼したので、研究をしようと思っても本はなし、莫大な計算も、書きかけの論文もなくして、悲惨な状態に彷徨していた時とて、せめても次の時代のためと、天文台長に指命されるままに引きうけてしまった。……玉川瀬田の親戚の同居先を暗いうちに出て、新宿の日の出を見、武蔵境から一里近く歩いて三鷹の天文

台に通ったものである。焼けた建物、毀されたドーム、望遠は錆びついていた。……」1954年に先生は文化勲章を受章されましたが、理論天文学における衆知の業績に加えて、この天文台の復興も賞の対象となったに違いありません。

先生の略歴を続けますと、1957年に東京大学を御退官になり名誉教授とされましたが、続いて1960年まで東北大学教授を、さらに1960年から1964年まで宇都宮大学学長をお勤めになり、宇都宮大学の名誉教授でもあります。先生は文化勲章の他にも、1960年に米国のJames Watson賞（天体力学における業績に対して）を、1967年に勲一等瑞宝章、1976年に朝日賞を受賞、そして先生の生前の諸業績に対して、先日、正三位銀盃をいただいたと聞いております。先生の略歴はだいたい以上のようにあります。

天文台の復興と共に忘れてならないのは、先生が大望遠鏡の設置にかけた執念でしょう。日本に大望遠鏡が是非とも必要であることを、天皇陛下に直訴したというエピソードがあります。先生自身、次のように物の本に書いておられます。「……その日は未明に目がさめた。よもや 刑に処せられることもなかろうが、現職をやめさせられることになるだろう。どうせ停年まで長くもないから、次の時代のためにと意を決して講演の原稿に手を入れた。……」これは、1951年、宮中の講書始めでの御前講演のことで、直訴の成果（？）は、岡山県竹林寺山山頂に1960年に建設された188 cm 反射望遠鏡に具体化されて、これまで日本の天文学に寄与してきた功績は計り知れません。

先生が御退官になった1957年に、筆者は大学院博士課程の2年生で、したがって、先生の講義を、教養学部第4学期の天文学概論だけではなく、麻布飯倉にあった天文学教室で本格的に聴講した（新制では）数少ない学生の一人です。天文学科（当時は物理学科天文）の学生は、ひとクラスが高々数名で、

全員が講義室の最前列に席を取れるから良いのですが、先生は、馴れないと判読できかねる数式と文字を、猛烈な速度で（したがって薄い字で）書き進み、黒板いっぱいになるやいなや、惜しげもなくさっと消してしまう、という習慣をお持ちでしたので、なかなか大変でありました。しかし、かの分厚いR. H. Fowlerの“Statistical Mechanics”を数回の講義で片づけてしまう、などのことは、この故に可能であったわけです。

先生は天体力学、天体物理学両分野の講義をされておりましたが、その前者の講義ノートは、1975年度朝日賞の対象となり、1976年に出版された、上述の大著“Celestial Mechanics”の前哨となったものです。全5巻9冊5560頁（文献5000余点）には、ラプラス以降の200年間の天体力学の諸成果が凝縮されており、先生は本書をup to dateに保とうとするあまり、印刷中に発表される新文献を次から次へと追加していくために、校了がおくれにおくれて、初めの本屋さん、米国のMIT Pressは第2巻3冊までで降りてしまったくらいです。第3巻以降は文部省の刊行助成金を得て日本学術振興会に引継がれたという次第です。

先生は専門分野の著作の他に、多数の名文章を残しておられます。その昔、国文学者折口信夫に師事されて和歌、俳句、漢詩などに堪能であったことも聞いております。「一目渺茫たる沙漠に疲れはてた旅人は日暮れむとして地平線の遙かあなたのオアシスを夢みる。蒼穹にきらめく銀河の彼方のかすかなる愛の子守歌を夢みる。遙かなる星、遙かなる銀河、そこに人生の詩がある。行路の涙がある。そこに輝ける希望があり、永遠の愛の揺籃がある。……」これは「星雲の彼方に」の序文の初まりの文章で、筆者が新制東京大学に入学した年に発行され、当時の若かりし筆者の、天文学への情熱をかき立てた思い出深い文章であります。つつしんで先生の御冥福をお祈りいたします。

封筒の世界旅行

飯 高 茂（数学）

イギリスのウィルソン氏から、別刷の入った郵便が届いた。白地の大きな封筒にG. Wilson と書いてあり、それを乱雑に誰かが消している。上には、ミラノ大学、グリーンとあり、これも汚なく消してある。私の宛先は、左の隅に小さく囲って書いてあり、右隣りのオックスフォードのデービス教授宛の字の方がずっと立派である。しかしこちらは、誰かが線をひいて消している。

私はこの瞬間、地質学者の推理を用いる必要を感じた。

原産地はミラノ、そこから、イギリスに追われ、オックスフォード内で学内便として使われ、三度目のお役目をおおせつかり、日本に派遣された。これが、彼の地史である。

そこで、この封筒を、アメリカの久賀教授宛に使うことにした。そして、もう一度、アメリカからイタリアに送ってもらえれば、少く共5度の役目をして世界一周ができる筈である。これ程有意義な世界旅行も珍しいと思う。

< 学部消息 >

教授会メモ

11月定例教授会

11月15日(水)午後1時30分より

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 寄附の受入れについて
4. 会計委員会報告
5. 教務委員会報告
6. その他

12月定例教授会

12月20日(水)午後1時30分より

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 昭和54年度文部省内地研究員の受入れについて
4. 寄附の受入れについて
5. 人事委員会報告
6. 会計委員会報告
7. 企画委員会報告
8. その他

1月定例教授会

1月17日(水)午後1時30分より

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告

3. 理学部規則の一部改正について

4. 会計委員会報告
5. 教務委員会報告
6. 学部長候補者選出
7. その他

2月定例教授会

2月21日(水)午後1時30分より

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 学士入学について
4. 転学部・転学科について
5. 昭和54年度受託研究員の申請について
6. 昭和54年度内地研究員の受入れについて
7. 昭和54年度情報処理関係内地研究員の受入れについて
8. 昭和54年度日本学術振興会流動研究員の受入れについて
9. 昭和54年度日本学術振興会外国人招へい研究者(長期)の受入れについて
10. 寄附の受入れについて
11. 評議員改選
12. 人事委員会、会計委員会半数選出
13. 人事委員会報告
14. その他

人 事 異 動

〔一般職員〕

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
化学		今井 勲	53. 9. 21	文部技官に採用	
臨海	事務官	久保田 一子	53. 9. 30	辞職(勸奨による)	
物理	技官	青柳 テル子	53. 9. 30	辞職	
情報	技官	仲野 憲一	53. 10. 1	国立民族学博物館	
情報	事務官	吉野 敏夫	53. 11. 16	事務室主任に昇任	庶務部から
情報	事務官	安原 恵理子	53. 12. 1	転任	広島大から
植物	事務官	浅見 ノブ子	53. 12. 31	辞職(勸奨による)	
植物園	技官	久保田 秀夫	53. 12. 31	辞職(勸奨による)	
情報	事務官	今井 みゆき	53. 12. 31	辞職	
臨海	事務官	臼井 幹郎	54. 1. 16	事務室主任に昇任	法学部から

〔助手〕

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助手	今里 純	53. 10. 22	復職した	休職期間 53. 2. 1~53. 10. 21
鉱物	助手	田賀井 篤平	53. 10. 31	退職	
化学	助手	福永 迪雄	53. 11. 1	復職した	休職期間 51. 10. 25~53. 10. 31
生物 化学		林 秀則	53. 11. 1	助手に採用	
地物研		三浦 彰	53. 11. 1	助手に採用	
物理	助手	梶浦 信孝	53. 11. 1	高エネルギー物理学研究所助教授に昇任	
物理	助手	坂井 一雄	53. 12. 1	山梨大学助教授に昇任	
動物	助手	本川 達雄	53. 12. 1	琉球大学講師に昇任	
動物	助手	加藤 邦彦	53. 12. 2	休職にする	休職予定期間 53. 12. 2~54. 12. 1
動物		宇川 千佳子	54. 1. 1	助手に採用する	
生化	助手	木村 一郎	54. 1. 1	国立武蔵療養所筋生理研究室長	
物理	助手	安藤 恒也	54. 1. 16	筑波大学助教授に昇任	
物理	助手	水島 公一	54. 2. 1	休職にする	休職予定期間 54. 2. 1~54. 12. 31

〔講師以上〕

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助教授	上村 洸	53. 11. 1	教育職(→)1等級(東京大学教授理学部)に昇任させる	
物理	助手	若林 健之	53. 12. 1	教育職(→)3等級(東京大学講師理学部)に昇任させる。	

〔併任教授〕

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
地球物理学	教授	梶浦 欣二郎	53. 12. 1	東京大学教授理学部に併任する 併任の期間は昭和54年3月31日までとする	地震研究所長

外国人客員研究員報告

所属	国籍	氏名	現職	研究期間
化学	日本	鐸木 茂子	サルフォード大学講師	54. 1. 1 ~ 54. 6. 30
地理	アメリカ	Rhoads Murphey	ミシガン大学教授	54. 1. 20 ~ 54. 5. 10
地球物理学	日本	早津 昭男	ウエスタン・オンタリオ大学 助教授	54. 1. 1 ~ 54. 7. 31

11月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
情報	教授	国井 利泰	アメリカ合衆国	11. 9 ~ 11. 25	コンピュータのソフトウェアと応用に関する第2回国際会議出席およびデータベースに関する研究連絡のため
地理	教授	吉川 虎雄	大韓民国	11. 3 ~ 11. 10	大韓地理学会秋季大会出席および自然地理学に関する調査研究のため
地質	助教授	島崎 英彦	メキシコ	11. 1 ~ 54. 4. 30	地質・鉱床の調査・研究のため
化学	教授	向山 光昭	アメリカ合衆国	11. 30 ~ 12. 8	有機合成化学に関するセミナー出席および調査研究のため
物理	教授	久保 亮五	ベルギー デンマーク	11. 18 ~ 12. 2	第17回ソルベイ国際物理学会議出席および統計物理学に関する研究連絡のため
物理	助手	北原 和夫	ベルギー ポーランド ドイツ連邦共和国	11. 18 ~ 12. 7	第17回ソルベイ国際物理学会議出席および統計物理学に関する研究連絡のため
天文	助教授	辻 隆	ニュージーランド オーストラリア	11. 28 ~ 12. 12	国際天文連盟第1回アジア・南太平洋地区会議出席および天体物理学に関する研究連絡のため

12月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
人類	助手	松谷 暁子	インド, ネパール	12. 9 ~ 12. 24	第10回国際人類学民族学会議出席および古民族植物学の研究のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地物	教授	浅田 敏	アメリカ合衆国	12. 6~12. 9	アメリカ地球物理連合秋季大会出席のため
人類	教授	渡辺 直経	イ ン ド	12. 9~12.17	第10回国際人類学民族学会議出席のため
人類	助手	佐藤 俊	ケ ニ ア	12.15 ~54.3.20	ケニア北部乾燥地域における遊牧民、 農牧民の生態人類学的研究のため

昭和54年1月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	教授	平川 浩正	オーストラリア	1.20 ~ 2. 2	国際会議「動波および天体の動崩壊」 出席のため
地理	助教授	小堀 巖	アメリカ合衆国	1. 2~ 1.14	乾燥地域周辺における砂漠化に関する 国際会議出席および乾燥地域に関する 研究のため
地物研	助手	金田 栄祐	カナダ	1. 6~ 3. 2	科学衛星「極光」のテレメトリ受信 による宇宙科学研究のため
地物研	助教授	國分 征	カナダ アメリカ合衆国	1. 8~ 3. 8	カナダ地域における磁気圏入射粒子 と電磁波動の到来方向調査（予備調 査）のため
化学	教授	不破 敬一郎	香港・台湾	1.12 ~ 1.20	水質汚濁の方法論の標準化に関する 委員会出席および無機化学に関する 研究連絡のため
物理	教授	久保 亮五	アメリカ合衆国	1.14 ~ 1.27	光散乱の物理セミナー本会議および 1979年冬期個体物理研究集会出席の ため
数学	助教授	新谷 卓郎	イ ン ド	1. 6~ 1.18	国際シンポジウム「保型形式表現論 および整数論」出席のため
化学	教授	大木 道則	連 合 王 国	1. 8~ 1.21	有機化学に関する調査研究および科学 教育事情調査のため
物理	助教授	釜江 常好	アメリカ合衆国	1.22 ~ 1.28	高エネルギー物理学に関する研究連 絡のため

2月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地物研	助教授	佐藤 哲也	アメリカ合衆国	2.15 ~55.2.14	プラズマ物理学に関する研究のため
物理	教授	山崎 敏光	カナダ アメリカ合衆国	2.15 ~ 3.15	中間子による原子核・物性の研究の ため
中間子	助手	中山 久義	カナダ アメリカ合衆国	2.10 ~ 2.28	中間子による原子核・物性の研究の ため
化学	助教授	吉田 政幸	中華人民共和国	2. 1~ 2.13	遊離基の化学に関する調査および学 術交流のため
地物	教授	竹内 均	マリアナ諸島 ボナベ島	2.15 ~ 2.27	第1回ミクロネシア地理学集会出席 および地球物理学に関する調査研究 のため

地物教授	岸保勘三郎	インド ユーゴスラビア	2.17～3.8	第5回モンスーン計画会議, 第15回地球大気開発計画組織委員会会議出席のため
物理講師	遠山潤志	アメリカ合衆国	2.28～3.13	プラズマ物理学に関する研究のため
情報教授	山田尙勇	アメリカ合衆国	2.27～3.5	中文計算機学会国際会議出席および情報科学に関する研究連絡のため

外国人留学生・ 研究員と本学部 教職員との懇親会

標記の懇親会が、外国人学生委員渡辺直経教授の招待で、2月28日(水)午後5時30分頃から根津の弥生会館で開催された。

この会は学部長、評議員、協議員ならびに関係学科、専門課程の教官がホスト側となり、事務部からも多数が参加した。

懇親会は渡辺委員、学部長の挨拶に引続き、学部長が乾杯の音頭をとり、終始たのしいふん囲気のもとに歓談が行われ、午後7時頃次回を約して散会した。

編集後記

本号は、いろいろな事情が重なりあって発行が遅れただけでなく、最後の瞬間になって、印刷所で写真が盗まれるという事件があり、停年御退官の先生方、および萩原先生のお写真ののらないまつ、28日の卒業式に間に合わすべく、発行ということになってしまいました。お写真は次号に掲載させていただきたいと思います。

さらに若林先生の御寄稿分も、写真が必要なものであるために次号に送らざるを得なくなりました。

また、表紙には空からみた植物園の貴重な写真をおあずかりしていただのですが、使わせていただくことができませんでした。空白をうめるべく、手許にあった古地図を一枚のせました。

御寛容をお願いいたします。(S)

編集：

平川浩正(物理)	内線	3314
飯高茂(数学)	内線	3205
小平桂一(天文)	内線	4341
田隅三生(化学)	内線	3148
鈴木秀夫(地理)	内線	3288 2619